

昭和も遠くなりけり

「降る雪や明治は遠くなりけり」は昭和の俳人中村草田男の代表作とされる有名な句だが、去る5月29日の日経朝刊に出た佐佐木幸綱の「詩歌の賞味期限」という随筆によると、最近では引用されることが少なくなっているそうだ。その理由は、明治生まれの人がほとんどいなくなり、この句に本当に共感できる人が減ったからではないかとのことである。そうかもしれないと思う。私のように、昭和二桁の初めに生まれた人間には、明治は本の中でしか知らない時代である。

中村草田男の父君は愛媛県出身の外交官だったようで、草田男は少年時代を愛媛県内と東京で過ごした。小学校高学年のときには東京に居て、赤坂区青南尋常小学校（現在の港区立青南小学校）で学んだ。愛媛県に戻り、旧制松山中学、旧制松山高校を卒業した。その後の数年間に何をしていったのか私は知らないが、何年も経ってから東大文学部に入学したようだ。昭和6年（1931年）、31歳の「老大学生」として、22年振りに母校の青南小学校を訪れたとき、この句を得たとされている。その縁で、句碑がこの小学校にあるそうだ。私が住んでいるところから遠くないところにあるわけだが、私は実見したことはない。

明治はもちろん遠くなった。私は、最近昭和も遠くなったと感じている。草田男が上記の句を詠んだのは、明治が終わってから20年ばかり経ってからだ。平成23年の今、昭和が終わってから22年半も経ってし

まったのだから、昭和も遠くなるのは当たり前だと思う。「われは明治の児なりけり」と歌ったのは永井荷風だが、私は「われは昭和の児なりけり」と思っている。それだけに、昭和が遠くなるのは淋しいことだ。荷風は、関東大震災の後で作った「震災」と題する詩のなかで、上記のように書いており、その直ぐ後には、「ある年大地俄かにゆらめき／火は都をやきぬ」という句がある。東日本大震災の後の現在と状況が少し似ていたのだ。これには不思議な感じがする。

現在多くのことが昭和のころとは違ってしまった。これからもっと変わっていくだろう。一番変わったのは何だろうか。私は政治の在り方、政治に関わっている人の動きではないかと思う。しかし、それは毎日マスコミを賑わすことだからそう見えるだけで、どの分野でも変化は起きているのかもしれない。たとえば、大学と大学人も変わったと思う。

第2次世界大戦後の世界を動かしたのは、良くも悪くも、イデオロギーの対立だった。一方に自由主義・資本主義があり、他方に社会主義と共産主義があった。これが、1980年代末のベルリンの壁の崩壊とソ連の解体を契機として大きく様変わりした。当時から、イデオロギー対立の後に来るものは、民族の対立と宗教の対立ではないかと予想されていたが、それはかなりの程度まで正しかったようだ。

日本国内では、民族の対立や宗教の対立は大きな問題とは言えない。現在の日本の問題は、かつてのイデオロギー対立のようなハッキリした対立軸がないことだ。その状況の中で人々は右往左往している。民主党と自民党の間には、政策上の大きな差があるとは思えない。それにも拘わらず、政争に明け暮れているのは、親近感や信頼感の有無といった微妙な心理的要因、利権が絡んでいて表に出ない関係などがベースになっているからではなかろうか。イデオロギーなどよりも、人間臭い非論理的なものの方が人を動かす力になるのは、考えてみると当然ではないかという気がする。

難しい世の中になったものだ。昭和時代に、日本は政治的に大きな振れを何度か経験してきた。日本人は一方に流れやすい民族だというのが定説になりつつあるようだ。流れができてしまうと、誰にも止めることができない。その例が昭和16年12月の対米英開戦だ。何故成算のない戦争に突入したのかについては繰り返し議論されてきた。冷静さを失ってしまう民族性というものがあるのかもしれない。今こそ、冷静さを保つよう気を付けないといけないと思う。
(おわり)